

70周年迎えた中部日本放送 杉浦 正樹代表取締役社長に聞く

キーワードは「未来にワクワクを」 「映像、音声コンテンツを全国、世界に」

CBCが“古希”を迎えた。日本初の民間放送局である中部日本放送は1950（昭和25）年に会社を設立し、昨年70周年を迎えた。51年のラジオ放送開始からは、この秋が70周年にあたる。この間、東海地方を代表する放送局への道を歩み、名実ともに放送業界を牽引し続けてきた。「東海地方の皆さんにここまで育てていただいた。感謝の一方で、今は放送事業の大きな転換期」という杉浦正樹・中部日本放送代表取締役社長にこれまでの道のりと今後の展望を聞いた。

（聞き手は塚本隆編集長）

——70周年を迎えた率直な感想を聞かせてください。

杉浦正樹社長（以下、杉浦） 1950年の12月15日に、まず会社ができて放送の準備をして、実際に電波が飛んで正式に民放第一声が流れたのが翌年の9月1日の朝6時半ということになります。

この70年間、放送事業が継続し、世間に定着させて来ることができたと感慨深いです。地元の方に育てていただいた、という思いが強いです。ただ、一方で放送事業は今、新たな転換期を迎えているとも思っています。

——CBCの長い歴史、発展の経緯を振り返っていただくと。

杉浦 まず、ラジオの開局から5年後の1956年に、東海地方で最初の民間テレビ放送を開始しました。テレビは今年、開局65周年になります。その年にできたのがCBC会館です。テレビ開局は大きな出来事でした。

そして、会社設立から10周年にあたる1960年という非常に早い時期に上場しました。放送業界ではこの地区唯一の上場会社です。上場によってこの地域の方々に会社を育てていただきたい、という思いが強かったのだと思います。

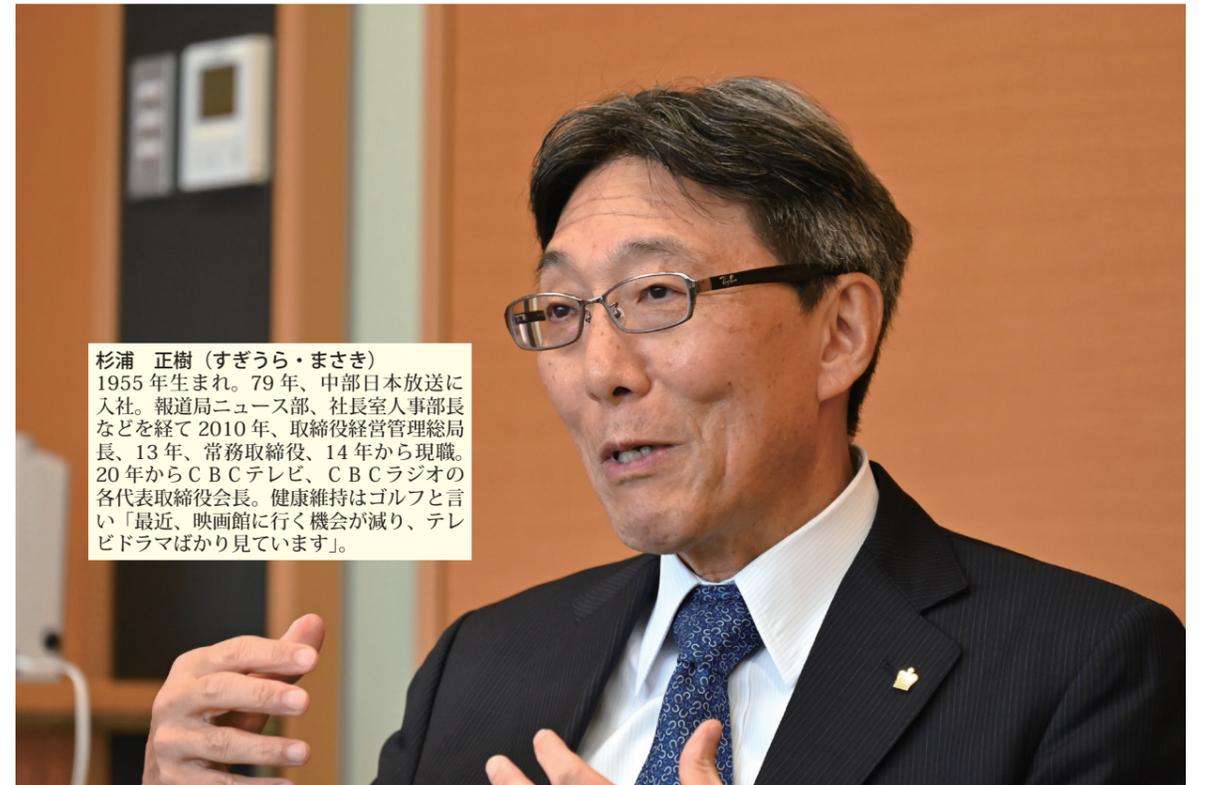
同じ60年には、日本初の民間ゴルフトーナメントの「中日クラウンズ」がスタートしまし

た。CBCの歴史は「初めて」の歴史ですが、番組としては、報道育ちの私は、74年に始まったローカルニュース番組「CBCニュースワイド」を挙げたいと思います。

——夕方の人気情報番組でした。

杉浦 今でこそ各局が放送していますが、夕方のローカルニュースワイドの先駆的な番組の一つとして認知され、テレビ報道を引っ張って来たという思いがあります。

その後、テレビはどんどん発展して社会に大きな影響を与える存在になりました。直近では、午後の情報番組「ゴゴスマ」が人気になりました。午後のこの時間帯はドラマの再放送などが多かったのですが、世の中にいろいろ動きがある時間帯ということで、ローカルで生情報番組を開始しました。当初はこの地域のローカル情報を取り上げていましたが、その後、関東地区での放送が始まることとなり、内容も全国向けにシフトしていきました。生放送でのライブ感やゲスト陣も評価されて、各地の局からも引き合いがあり、現在は全国24局39都道府県、人口カバーでいえば、約1億1500万人に視聴いただけるまでに放送エリアが拡大しました。当時と同じ時間帯では、日本テレビ系列において在阪局の読売テレビさんが制作している情報番組が全国展開していたこともあり、「ゴゴスマ」もゆくゆくは全国に展開すること



杉浦 正樹（すぎうら・まさき）
1955年生まれ。79年、中部日本放送に入社。報道局ニュース部、社長室人事部長などを経て2010年、取締役経営管理総局長、13年、常務取締役、14年から現職。20年からCBCテレビ、CBCラジオの各代表取締役会長。健康維持はゴルフと言い「最近、映画館に行く機会が減り、テレビドラマばかり見えています」。

も意識はしていましたが、実際、ローカル生情報番組が全国展開することは異例ですので、喜ばしかったです。

■■■■ 防災ステーション宣言 ■■■■

——70周年の「未来にワクワクを」の3つのキーワード（チャレンジ、東海地方から考える、防災ステーション宣言）に込めた思いを。

杉浦 私たちは、この地域で育てていただきましたので、まず、この地域のことを考えたいと思いました。それと、私が入社したころからずっとこの地方には大きな地震が来ると言われていますので、当然、大地震を想定した防災は考えていかなければなりません。私たちも公的機関としての報道を考え、改めて防災ステーション宣言をさせていただきました。そして先ほどから申し上げている「初めて」へのチャレンジ精神。この3つのワードで存在意義をしっかりと述べさせていただいたということです。

——周年の記念事業なども企画されていますか。

杉浦 「チャレンジ」ということで言います

と、3年前に、映像で何かできないか、宇宙から事業を広げられないかという思いから宇宙旅行を目指す地元のベンチャー企業「PDエアロスペース」に出資しました。コロナ禍でこの周年期間中に実現できるかは分かりませんが、宇宙関連のイベントや番組なども企画しています。

その他には、倉本聰さんが伊勢神宮の自然に関して語る番組や、天海祐希さんと友近さんが伊勢を訪ねる番組を作りました。また、ラジオでは新しいことに挑戦しようとボーカロイド（コンピューターによる歌声合成技術）の初音ミクを周年キャラクターに起用しています。

——2021年3月期の決算が発表されましたが、今年度の経営方針などをお話してください。

杉浦 昨年度はコロナという特殊事情はありましたが、今の収入構造における10年後の収入予測がいきなり来てしまったという感覚を持っています。今後に関しても、放送はドメスティックな産業で、放送免許のエリアも限られている中で人口がどんどん減っていくと、広告などを含めてシュリンクしていく可能性があり